

令和4年度 西東京市立田無第二中学校 学校自己評価表

学校教育目標 本校の伝統である「誇れる上級生 学ぶ下級生」掲げ、地域、保護者と協働し、身に付けた学力と知性、豊かな心を確かなものにし、社会に貢献できる人材を育てる学校を創る。 健康 誠実 敬愛

	具体的方策	第2回 後期			学校関係者評価	関係者評価コメント
		学校自己評価				
		努力目標	成果目標	学校の取組み及び改善策		
健康 誠実	主体的な学びの実現 教師が「進んで学ぶような具体的な工夫がある」	5	5	教員の意識調査では明確に工夫している自身をもって回答したのは48%、肯定的な回答は100%であった。明確な回答は前期よりはやや微増しているが、授業改善を具体化することに同時に自身をもって指導ができる教員の育成が必要である。反対に生徒の側もそれに比例するように肯定的な回答は96%で目標には達しているが、明確に「充分あてはまる」と回答したのは半数以下の42%で、教員とほぼ同率となっている。また否定的回答は3%の生徒(13人)となり、個別対応や支援を行うようにしていく必要がある。	A	教師は100%生徒が進んで学ぶような工夫を行っており、生徒側にも概ね伝わっている。さらに改善するために「あまりあてはまらない」と回答した生徒がなぜそう感じたか検証が必要と思われる。授業が分かる、できたという喜びが子供たちの自己肯定感につながり、学校が楽しくなるので引き続きの工夫をお願いしたい。一人も取り残さない対応を願う。
	情報活用能力の育成 問題解決に向けて様々な方法を考え、よりよいものを選択し、取り組むことができる	5	5	生徒アンケートにおいて、「問題解決に向けて様々な方法を考え、よりよいものを選択し、取り組むことができる。」という項目において、令和4年度2学期には肯定的な意見は93%に上昇した。また、「二中モデル」のほかの項目でも概ね増加傾向であった。教員も、生徒も、2年間の研究を経て、情報活用能力の育成に成功したと考える。よって評価は5とした。	B	「情報活用能力の育成」について研究発表も行っており、着実に成果を上げていると思われる。しかし情報活用能力の育成の前に、教員個々のICTリテラシーを定量的に評価する必要がある。生徒の方が高いケースが増えてくると思うため突発的な対応にも、しっかりとオンライン授業等を活用できるDX人材育成に力を入れてほしい。
	個別最適化された学びと協働的な学びのバランス良い推進 生徒が考える時間と機会の確保、個別学習とグループ学習の適切化 教師が「授業において生徒が考える時間と機会を確保し、目的に合わせて個別学習とグループ学習を行えた」	5	5	教員の意識調査では、肯定的な回答が約96%となっており、各教員が授業の中で意識的に生徒が考える時間と機会を確保し、目的に合わせて個別学習とグループ学習を効果的に活用している状況が見られる。生徒アンケートの結果も教員の意識を反映し、肯定的な回答が約96%となっている。課題としては、否定的な回答の生徒に対して、自ら協働的な学習に参加できるような指導の工夫を考えていく必要がある。	A	協働的な学びにおいて、話し合いに積極的に関われない生徒も学級にはいるのではないか。その生徒をどやって話し合いの輪に入れるかが課題であろう。全員が参加する授業にもっていったら良いと考える。
敬愛	ファシリテーターの育成 生徒主体の学習、ルーブリック表などによる学習ゴールの明確化、生徒発言率の向上 教師が「授業の目標を明確に示し、生徒主体の学習を取り入れることができた」	5	5	教員の意識調査では、肯定的な回答が約96%となっており、各教員が授業の最初に生徒に授業目標を示し、その達成に向けて生徒が主体的に学習に取り組む活動を意識的に取り入れていることが分かる。また、生徒アンケートの結果も教員の意識的な取り組みの結果、肯定的な回答が97%となっている。課題としては、生徒のファシリテーターとしての資質が向上しているか具体的に評価できるようにすることである。	A	ファシリテーター能力は意図的に育成することが必要と考える。育成に当たってはなかなか難しいと思う。生徒全員のファシリテーションでの資質向上は難しいと考える。
	教育相談機能の充実を図り、定期的な面談の実施で生徒との関係づくりや実態把握を行うことで、不登校やいじめの未然防止、虐待の早期発見 「いじめ防止委員会、虐待防止委員会、教育相談部会での速やかな情報共有及び外部機関との適切に連携ができた」	5	5	教員の意識調査では速やかな情報共有及び外部機関との適切に連携ができたと回答したのは46%、肯定的な回答は92%であった。全体的に高水準であるが、情報共有や外部との連携は全教職員が日々強く意識していくことであり、課題を感じている教員への研修が必要である。生徒によるアンケートからは教員から教育相談的な姿勢を感じる生徒は95%で目標を大きく上回っていることは成果といえる。一方で否定的な意見は5%存在することに目を向け、個別に支援が必要な生徒への対応について今後とも検討を重ねていく必要性があると言える。	B	重要な項目であるため、100%肯定的になるよう、検討を重ねて欲しい。保護者への情報共有・説明が欠けていると感じる。しかし、「あまりできなかったとの意見(8%)」には、村度の無い意見を出せる教員がいることに安堵するとともに、今後も改善を検討してほしい課題であると感じただければと思う。
	思いやりと礼儀があり、優しさ、あったかさのある学校 教師が「話を聞いてねいに聞き、受け止めている」	5	5	教員の意識調査では自身をもって「あてはまる」と回答したのは69%、肯定的な回答は96%であった。前回よりやや減少している。毎月「あったか先生研修」を行い、教員が生徒に対して寄り添い、話を聞いてねいに聞き、受け止めている」と自信をもって100%回答できるように意識を高めていく必要がある。 生徒のアンケート結果では「学校は全般的に楽しい」と肯定的に回答したのは昨年度の77%から今年度は82%に増加がみられた。今後も生徒が楽しく登校し学習する環境づくりをし、あったか先生として生徒に寄り添う必要がある。	A	担任が常に生徒の話の聞こえとする雰囲気、非言語の部分が大切であると思う。ご苦労はあるかと思いますが、あったかさのある学校を願っている。
地域連携	学校連絡協議会設置により地域とともにある学校運営を行う 教員アンケートで地域と連携した学校運営ができたか	2	5	放課後学習教室の管理・運営や、夏休みの補習教室での講師等は、学校連絡協議会の協力を受け、昨年度より実施した内容である。多くの生徒が自習や補習として有意義だったとの感想を述べており、来年度以降も継続していきたい成果となった。この成果とは裏腹に努力目標が2と低いのは、学校連絡協議会と連携した活動が教員間で周知されていなかったことが原因だと考えられる。担当者のみの把握に留まり、全体に連絡や報告が不十分であった。	A	地域学校協働活動は始まったばかりであるが、地域との協働は徐々に増え始めている。管理職だけでなく他の先生たちが地域に何を求めているのか期待しているのか具体的な話を聞けると良い。今年度は、夏休み補習授業、清掃ボランティア、部活動等、積極的に地域応援の呼びかけを行い、着実に成果を上げていると思われる。
業務改善	経営支援部における業務改善 職員室の環境整備を5項目以上実施した	5	5	本年度の職員室の環境改善について、「会議スペース(長机)の設置」「カゴ置き棚の設置」「職員室内備品(プリンター、進路棚、教務棚、電話)の再配置」「使用しない古い職員机及び棚の撤去」「教科ロッカーの増設」等、6項目以上の改善を行った。教員の意識調査では、職員室が「使用しやすくなった」もしくは「やや使用しやすくなった」と回答した教員が96%であった。以上の結果から、努力目標及び成果目標は達成できたといえる。	A	外部からは分からない項目内容である。経営支援部で変更したいこと、気になったことが変えられると良い。担当教員の評価からAにさせていただく。